



●改めて ピンチをチャンスに

名古屋樹脂工業株式会社

代表取締役 伊藤 誠一

新年明けましておめでとうございます。皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

この原稿を準備している今は、ちょうど国会の解散直後です。2013年の景気がどんな形相を見せてくれるのか、皆目不明であると同様に、この国の政治もどんな姿を見せてくれるのか、期待よりも不安の大きさが増すばかりです。

弊社は、今年の5月に大きな火災に見舞われました。約1千平米の工場一棟が全焼した光景を前にした時、恰も東北震災の惨状もかくの如しであったであろうという思いに至りました。気分は茫然自失ながら、緊急の火災現場処理、毀損工程の客先対応に忙殺される半年が過ぎました。

事業継続も半ば諦めざるを得ないと感じる瞬間も正直ありましたが、顧客、取引先からのお見舞いやご支援、同業者からの毀損工程の応援生産申し入れは、その迷いを吹き飛ばすに余りある厩大さでありました。また弊社社員も一人も欠けることなく、黙々と火災現場を片付け、休日も厭わず復旧の為に勤務する姿に、どれだけ励まされたか。その時は、一瞬でも挫けそうになった自分を恥じるばかりでありました。

弊社は創業56年という、私がこの世に生を得た年数と同じ年数を経ています。ピンチはいくつもありました。直近ではリーマンショックによる経営苦境は、弊社とて例外ではなく、多分に社員の我慢と努力のもと、ようやく後遺症から抜け出すことができそうな今年の春でした。その折に発生したのが今回の火災であり、またまたピンチの再来でした。

ピンチはチャンスであるという言葉は、耳当たりのいいフレーズではありますが、実際のピンチに、それがチャ

ンスだと思えるほど私は強くもありません。しかし今回の社員、顧客取引先、同業者の姿勢から、弊社の今までに培った実像を垣間見ることができ、このピンチをチャンスにせねばならないという使命感が湧き上がります。改めてピンチをチャンスにする覚悟、これこそが長年社業を続けてきた財産なのではと思います。

日本の中小製造業は、世界経済の大きなうねりに飲み込まれようとしています。国内の産業空洞化などという、いかにも悲観的な風潮が今、はびこりつつある気がします。殊に製造立国の愛知・名古屋への風当たりは、毎日が嵐ではないかと。

しかし、歴史は教えてくれます。戦後1ドルが360円だった時代から、80円に至るまでの半世紀間、今いる我々は生き続けて参りました。更なる円高が到来するやもしれませんが、それは裏返せば、日本の実力です。借金まみれの危うい状況にあるにしても、またまた実力を問われる日本の試練は続きます。他国の通貨が円に対して安くなればなるほど、その国の輸出には有利でしょうが、輸入に頼らざるを得ない各国の国民生活基盤は確実に苦しくなるジレンマを併せもっているはずです。日本は相対的には豊かな生活基盤を維持しながら、グローバル競争では為替ハンデに苦しむというパラドックスに臨む稀有な国だと思われます。

弊社は、海外進出できるほどの規模もノウハウも持ち合わせませんが、確実に世界経済のうねりの影響を受けますし、火災復興の使命も重なります。その二重苦、三重苦を背負いつつも、だからこそ、改めてピンチをチャンスに変える絶好な好機到来の年にしたいものです。